

大学生の「意欲」に関する研究 (2)

小林 邦雄¹

要旨

大学生における意欲について、職業に対する取り組みや意識に関わるモラトリアム、ストレス状況への対処法、及び依存性の3種の変数との関連で検討した。

研究1では147名の大学生に対して、「領域別意欲低下」及び「モラトリアム」を査定する質問紙を実施し、回答を相関分析により検討した。その結果、職業について「決定」している被検者は「学業」と「大学」生活全般における意欲が高いこと、職業について「模索」している被検者は「授業」「学業」「大学」のすべての領域で意欲が高く、「授業」「学業」「大学」における意欲低下の顕著な被検者ほど、職業について、積極的に「模索」せず、「延期」、「混乱」、「回避」していることが示された。

研究2では、221名の大学生に対して、「領域別意欲低下」及びストレス状況での「コーピング」(対処法)を査定する質問紙を実施した。「学業」での意欲が高い被検者ほどストレス状況で「諦め」ることなく、「行動・感情の抑制」を行いつつ「積極的な問題解決」を図る傾向が強いこと、「大学」領域において意欲の高い被検者は「積極的な問題解決」を行うが、「他者からの援助を求める」傾向も強かった。「授業」における意欲のあり方とストレス状況における対処法との間に対応はみられなかった。

研究3では109名の大学生に「領域別意欲低下」及び「依存性」を査定する質問紙を実施した。自分を理解し見守ってくれ、想起するだけで安心感が得られるような信頼に値する人物との共生・共存の感覚、すなわち「依存感覚」が強い被検者ほど「学業」と「大学」における意欲が高かった。「大学」で意欲低下が著しい者は「依存欲求」が弱く、「依存行動」をとらないという「依存の拒否」の傾向が強いことが示唆された。

緒論

大学は学校教育の終着駅であり、学生は卒業後、就職して社会人になることを求められる。より専門的な知識や技術を習得するために大学院に進学する者も、大学院の教育課程修了後の進路について具体的な展望を持つことが不可欠であろう。したがって大学生にとって個人差はあるが、職業について模索することは不可避である。この「模索」の時期こそ、精神分析家エリクソン(Erikson, E.H.)⁽¹⁾によるならば、「個体が自由な役割実験を通してその社会のある部門に自己の適所を発見する」ための最終的な準備期間として、いついかなる社会も公認している「心理・社会的猶予期間」(psychosocial moratorium)すなわち「モラトリアム」である。

筆者は大学生の「意欲」について論じたことがあるが(小林⁽²⁾)、そこで言及した下山^{(3)・(4)}の「意欲低下」と「モラトリアム」に関する研究の追試を本稿の研究1で行う。さらに大学生の「授業」「学業」「大学」の各領域における「意欲」の様相を、ストレス状況での「コーピング」(対処法)(研究2)、及び「依存性」(研究3)などの変数との関係で検討し記述する。3つの調査は体系的なデザインに沿ったものではなく、その時々筆者の関心(というよりは「思いつき」)に基づいて、いずれも授業の一環として実施されたものであるが、「意欲」に関するこれらの研究を通して大学教育のあり方について考えたい。

研究 1

1. 目的

大学生の意欲のあり方について「モラトリアム」との関連で検討する。「意欲」については、下山の「領域別意欲低下」尺度²全 15 項目を、「モラトリアム」については、下山⁽⁶⁾の「職業未決定」尺度を発展させた「モラトリアム」尺度（下山⁽⁶⁾）24 項目と「職業未決定」尺度の下位尺度で「モラトリアム」尺度では用いられなかった（職業）「決定」尺度の 4 項目を合成した全 28 項目の尺度を「モラトリアム」尺度として用いる。目的は以下の通りである。

- (1) 「モラトリアム」尺度の信頼性と妥当性を検討する。
- (2) 「領域別意欲低下」尺度と「モラトリアム」尺度との相関を検討する。
- (3) (2) の結果を下山の先行研究の結果と比較検討する。

2. 方法

- (1) 被検者³ 私立大学学生 147 名（男子 100 名 女子 41 名（未記入 6 名）平均年齢 19.01 歳、標準偏差 1.06（未記入 9 名））
- (2) 材料 (i) 「領域別意欲低下」尺度（15 項目）(ii) 「モラトリアム」尺度（28 項目） 質問紙は 5 件法にて実施し、「そう思う」と回答した場合 1 点、以下 1 点ずつ漸減し「そう思わない」に 5 点を与え、逆転項目の処理の後に得点を合計し尺度得点とした（研究 2・3 も同様）。
- (3) 手続き 授業場面で集団法・無記名・強制回収にて実施。被検者は、返却時に調査用紙が自身のものであることが同定できるように、任意の「ID 記号」を記入し、調査内容に関する予備知識なしに、質問紙に回答した。2~5 月後に個人の尺度得点等を記載した用紙を添付した調査用紙が返却され、授業のなかで調査の趣旨と集計・分析結果について説明を受けた。
- (4) 調査実施時期 平成 21 年 5 月~7 月

表 1-1 「領域別意欲低下」尺度の確認的因子分析・項目分析結果

3. 結果

3.1 「領域別意欲低下」尺度と「モラトリアム」尺度の検討

3.1.1 「領域別意欲低下」尺度

大学生の意欲のあり方を査定するために用いた授業、学業、大学生活における意欲低下を査定する「領域別意欲低下」尺度は「授業」⁴「学業」

潜在変数	質問項目	観測変数項目	標準化係数推定値			R ²	α
			授業	学業	大学		
授業意欲低下		j3.何となく授業をさぼることがある.	.750			.529***	.661
		j1.授業に出る気がしない.	.705			.417***	
		j2.朝寝坊などで授業に遅れることが多い.	.491			.457***	
		j5.授業の課題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある.	.326			.332***	
		j4.大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い.	.324			.346***	
学業意欲低下		s5#.大学で勉強をすることで自分の関心を深めている.		.627		.427***	.706
		s3#.勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる.		.586		.508***	
		s2.勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう.		.562		.497***	
		s1#.教師にいわれなくても自分から進んで勉強する.		.559		.466***	
		s4#.必要な単位以外でも関心のある授業をとるようにしている.		.514		.426***	
大学意欲低下		u3.大学にいるより、自分ひとりでいるほうがいい.			.652	.559***	.695
		u5.大学のなかで自分の居場所がないと感じる.			.614	.497***	
		u1.学生生活で打ち込むものがない.			.559	.441***	
		u4#.大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である.			.621	.439***	
		u2#.大学ではいろいろな人と交流がある.			.371	.336***	
GFI=.842, AGFI=.782, RMSEA=.092 AIC=259.704			因子間相関				
			授業				
			学業	.487***			
			大学	.267*	.589***		

***p<.001 *p<.05

2. 下山は、当初「意欲低下領域」尺度と呼んでおり（文献（3））、筆者もこの名称を用いたが（文献（2））、後に下山は「領域別意欲低下」尺度と名称を変更した（文献（4））。尺度の内容からみても適切と考えられるので、本稿では後者の名称を使用する。

3. 文献（2）で扱った筆者による調査の被検者と同一の被検者である。

「大学」の3つの下位尺度で構成されており、各尺度の信頼性と妥当性は、本研究と同一の被検者群を対象として行った調査研究において既に確認したので、確認的因子分析と項目分析の結果のみを表1-15に再度掲げた。また「領域別意欲低下」の下位尺度間の相関係数⁶も表1-2に改めて示した。

表1-2 「領域別意欲低下」
尺度の下位尺度間の相関

	授業	学業
授業	-	
学業	.349***	-
大学	.121	.385***

***p<.001

3. 1. 2 「モラトリアム」尺度の検討

青年期の未就労者の職業・就職に対する取り組みや意識のあり方を査定する「モラトリアム」尺度全28項目は「決定」「模索」「延期」「回避」「混乱」の5つの下位尺度で構成されているが、この「モラトリアム」尺度が5因子構造を有することを確認するために、下位尺度の5つの構成概念の各々を潜在変数（因子）として、観測変数（項目）は関連する潜在変数のみから影響を受け、すべての因子間に相関があると仮定するモデルにより確認的因子分析を行った。

すべての潜在変数間の共分散（相関）が0.1%水準で有意となり、潜在変数の観測変数への影響の強さを示す指標である係数の推定値は、「模索」の影響を受ける5個（t2,t3,t4,t5,t6）が有意ではなかったが、他の23個は有意となった。また「模索」と関連する観測変数で唯一係数の推定値が有意となった1項目（t1）の推定値が負であるのに対して、有意とならなかった5項目の推定値は正であった。以上の結果から、データの初期モデルへの適合度が低いと判断し、モデルの改良を図り、初期モデルの「模索」からt1「将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている」を除去し、再分析したところ、適合度指標（GFI）=.774、修正適合度指標（AGFI）=.740、平均二乗誤差平方根（RMSEA）=.073、赤池情報量規準（AIC）=683.433であり、AICが初期モデルの値（754.831）から改善を示したため、改良後のモデルを採択し、項目分析を行い、最終的な結果を表1-3に示した。

項目相関係数（r_{IT}）は、全27項目のうち2項目（t6,a4）が5%水準、残る25項目はすべて0.1%水準で有意となり、 α 係数は、「模索」が.499と低かったが、他の尺度は、「決定」.815、「延期」.776、「回避」.751、「混乱」.789と、許容しうる値を示した。 α 係数については、「模索」以外の5尺度では本研究の値が下山の研究を上回ることから、本研究における「模索」の α 係数の低さはこの尺度の内的整合性の低さを示すのではなく、むしろ本研究における被検者群の何らかの特徴を現わしていると考え、「模索」尺度を採用することにした。そこで、今回用いる「モラトリアム」尺度は、下山の「モラトリアム」尺度24項目に、その母体である「職業未決定」尺度の下位尺度である「決定」尺度4項目を加えた全28項目から「模索」の1項目を削除したものとなった。

「モラトリアム」下位尺度間の相関係数を求め表1-4に示した。「決定」は他の4尺度のすべてと負の相関を示した。「模索」は「延期」とは無相関であったが、「混乱」及び「回避」とは有意な正の相関を示した。「延期」と「混乱」、「延期」と「回避」、及び「回避」と「混乱」の間には有意な正の相関が見出された。

3. 2 「領域別意欲低下」と「モラトリアム」の関係

意欲とモラトリアムの関係を検討するために、「領域別意欲低下」の下位尺度と「モラトリアム」尺度の相関係数を求め、表1-5に示した。

4. 「授業」尺度は「授業」領域での意欲低下を査定する尺度であり、この尺度の得点が低いことは「授業」に対する意欲が高い（「意欲低下」の程度が小さい）ことを意味し、得点が高いことは「授業」に対する意欲が乏しい（「意欲低下」の程度が大きい）ことを意味する。「学業」「大学」についても同様である。本稿では、誤解を避けるために、文脈により、「授業」を「授業意欲低下」、「学業」を「学業意欲低下」、「大学」を「大学意欲低下」と記すことがある。なお尺度名には必ず「」を付した。

5. 本稿では3つの研究で異なる質問紙使用しており、項目番号の重複を避けるため、使用した尺度に任意の異なるアルファベットを、項目には尺度を表すアルファベットと数字を組み合わせた項目番号を新たに与えた。

6. 尺度間の相関係数とは尺度得点間の相関係数を意味する。

表 1-3 モラトリアム尺度の質問項目・確認的因子分析・項目分析結果

潜在変数	項目番号	観測変数 (項目)	標準化係数推定値					FIT	α
			決定	模索	延期	混乱	回避		
決定	p1.	自分の職業計画は、着実に進んでいる。	.817					.696***	.815
	p3.	自分の職業決定に自信を持っている。	.730					.615***	
	p2.	自分のやりたい職業は決まっており、今は、それを実現していく段階である。	.721					.653***	
	p4.	自分なりに考えた結果、最終的にひとつの職業を選んだ。	.629					.587***	
模索	t2.	職業に関する情報がまだ十分ないので、情報を集めてから決定したい。		.647				.312***	.499
	t5.	これだと思える職業が見つかるまでじっくり探していくつもりだ。		.436				.360***	
	t3.	将来の職業としてはいくつかの職種を絞られてきたが、最終的にひとつ決められたい。		.361				.269***	
	t6.	職業は決まっていないが、今の関心を深めていくか職業につながると思う。		.261				.188*	
	t4.	自分の無限の可能性を考えると、とてもひとつの職業に限定できない。		.235				.234***	
	t1.	将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている。		(-.460) ⁷					
延期	d4.	自分の将来の仕事について真剣に考えたことがない。		.728				.629***	.776
	d1.	せっかく大学に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない。		.690				.548***	
	d2.	職業決定と言われても、まだ先のことのようで、ピンとこない。		.686				.535***	
	d3.	就職については、まじめに努力しなくても何とかなると思っている。		.546				.536***	
	d5.	自分の将来のことは、大学4年生になってから考えるつもりだ。		.538				.521***	
	d6.	今の自分にとって職業につくことは、重要なことではない。		.426				.393***	
混乱	c4.	誤った職業決定をしてしまうのではないかと不安があり、決定できない。				.820		.647***	.789
	c5.	自分一人で職業を決める自信がない。				.755		.590***	
	c3.	これまで、自分自身で決定するという経験が少なく、職業決定のことを考えると不安になる。				.692		.623***	
	c2.	職業決定のことを考えると、とても焦りを感じる。				.627		.634***	
	c1.	望む職業につけないのではと不安になる。				.462		.462***	
	c6.	私はあきらめるもなければ、あきらめなければ何にもないのではという感覚が邪魔する。					.315	.306***	
回避	a5.	自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない。				.797		.605***	.751
	a1.	何を基準にして将来をかんがえたらよいのかわからない。				.695		.542***	
	a3.	将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない。				.639		.482***	
	a2.	できることなら職業決定は、いつまでも先に延ばし続けておきたい。				.590		.608***	
	a6.	できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしていたい。				.403		.461***	
	a4.	職業につくということは、墓場に入るイメージがある。				.215		.232*	
因子間相関			決定	模索	延期	回避	混乱		
GFI=.784, AGFI=.740, RMSEA=.073, AIC=683.433			-						
			決定						
			模索	-.521***					
			延期	-.590***	.231				
			回避	-.881***	.499***	.846***			
			混乱	-.546***	.435***	.430***	.794***		

***p<.001 *p<.05

表 1-4 「モラトリアム」尺度の下位尺度間の相関係数

	職業決定	模索	延期	混乱	回避
職業決定	-				
模索	-.283**	-			
延期	-.431***	.084	-		
混乱	-.392**	.237**	.285**	-	
回避	-.634***	.202*	.650***	.570***	-

***p<.001 **p<.01* p<.05

「授業」領域での意欲低下は、「模索」とは有意な負の相関を、「延期」、及び「回避」の各尺度と有意の正の相関を示したが、

「決定」とは無相関であった。「学業意欲低下」は、「決定」、及び「模索」の各尺度と有意な負の相関を示し、他の3尺度との間には有意な正の相関が見出された。「大学」での意欲低下は、「決定」、及び「模索」の各尺度と有意な負の相関を示し、他の3尺度との間には有意な正の相関が見出された。

表 1-5 「領域別意欲低下」と「モラトリアム」の相関係数

モラトリアム	意欲低下領域		
	授業	学業	大学
職業決定	.003	-.256**	-.178*
模索	-.167*	-.306***	-.251**
延期	.236**	.398***	.233**
混乱	.056	.227*	.265**
回避	.197*	.382***	.295***

***p<.001 **p<.01* p<.05

7.削除前の初期モデルにおける推定値。以下、削除項目については、初期モデルでの推定値を()を付して記載した。

4. 考察

4. 1 「モラトリアム」尺度

本研究におけるモラトリアム尺度の各下位尺度の内的整合性は、「模索」を除き、満足すべき値を示し、下位尺度間の相関についても、「決定」と他の「モラトリアム」下位尺度とは負の相関を示し、「心理・社会的猶予」という「未決定」状態を意味するモラトリアム本来の構成概念を共有する「模索」「延期」「混乱」「回避」の下位尺度間ではすべて正の相関が見出されたが、これは下山の調査研究結果を概ね支持するものである。

「模索」の内的整合性の低さの意味について検討する。下山では、この「模索」尺度との項目相関係数(r_{IT})の値が最も大きいt1「将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている」が、本研究では、確認的因子分析で「模索」因子と負の相関を示し削除された。本研究で「模索」尺度との項目相関係数が最も大きい項目は、t2「職業に関する情報がまだ十分ないので、情報を集めてから決定したい」($r_{IT}=.647$)、次いで、t5「これだと思える職業が見つかるまでじっくり探していくつもりだ」($r_{IT}=.436$)だった。以上の結果は、本研究ではモラトリアムの初期段階にあり「模索」を始めたばかりの被検者が多いことを示唆してはいまいか。実際、被験者の63%が、学生生活への適応に精一杯で、「模索」のゆとりがないと推察される1年生であった。

そこで、1年と2年以上の上級学年間の「決定」尺度の平均得点を比較すると、上級学年(平均12.220, SD3.770)が1年(平均10.040, SD3.730)より高かった($t(145)=3.395, p<.01$)。また「模索」のすべての項目について、得点平均を1年と上級学年間で比較すると、t4「自分の無限の可能性を考えると、とてもひとつの職業に限定できない」のみが、上級学年(平均3.074, SD1.130)で、1年(平均2.311, SD1.103)より高かった($t(145)=4.003, p<.01$)。上級学年では1年生より(職業)「決定」の得点は高いにもかかわらず、t4「自分の無限の可能性を考えると、とてもひとつの職業に限定できない」の得点も高いという結果は、一見矛盾しているように見える。分析を進め、「決定」の尺度得点とt4の項目得点との相関係数を求めると、1年では相関は見出されず($r=.002, n.s.$)、上級学年で有意な負の相関が見出された($r=-.350, p<.01$)。以上の分析結果から本研究の被検者群のモラトリアムについて次のような解釈が可能であろう。

1年生は「モラトリアム」の入り口の前に立ったばかりで、職業問題で具体的に葛藤したり、悩んだりする段階にはいないが、1年生に比べ職業のことで「決定」している者が多く、それゆえ「モラトリアム」の「渦中」にある者も多いと考えられる上級学年では、職業・就職に関して真摯な「模索」を経て自身の選択で「決定」を済ませ、具体的なイメージや見通しを持ちその実現に向け活動している者もいるが、その対極に、そのような「決定」得点の高い同学年の学生が就職・職業について交わす会話や、多様な媒体を通じて職業について「模索」・「決定」するよう大学がかけてくる圧力に押されて苦し紛れに形ばかりの「決定」を余儀なくされたものの、その「決定」がt1に示されるような真の「模索」を経て下されたものでないがゆえに、実際には「自分の無限の可能性を考えると、とてもひとつの職業に限定できない」という「模索」の初期段階に止まっている「決定」得点の低い者が少なくない。「模索」の最終段階を表していると考えられるt1が「模索」因子と負の相関を持ち、削除されたことは本研究の被検者では真の「模索」とそれを踏まえた「決定」を行う者が少ないことを示唆しているかもしれない。

4. 2 意欲とモラトリアム

「授業意欲低下」が「延期」及び「回避」と有意な正の相関を持つ点で、下山と本研究の結果は一致した。また「模索」が「学業意欲低下」及び「大学意欲低下」と有意な負の相関を、「延期」「混乱」「回避」が「学業」及び「大学」と有意な正の相関を持つ点も、基本的には下山と一致した。しかし「授業意欲低下」と「模索」の間に下山の研究では見られなかった負の相関が示された。また下山は検討していないが、「決定」と「学業」及び「大学」とが有意な負の相関を示した。以上の結果から、「学業」や「大学」とい

う領域で意欲の強い被検者ほど職業・就職問題に「模索」しつつ真摯にとり組み「決定」に到達していること、また「決定」はしていないが「模索」している者は「授業」での意欲も高いことが示された。

「模索」が「領域別意欲低下」の下位尺度のすべてと有意な負の相関を示すことに着目して、「授業」「学業」「大学」の各尺度について、尺度得点の高低により被検者を4群に分け削除項目(t1)も含めた「模索」尺度の各項項目得点の群間での差を分散分析により検討した。結果を以下に記す。

「授業」では意欲の最も高い群でt6「職業は決まっていないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う」の得点平均が最も意欲の低い群より有意に高かった ($F(3,143) = 4.762, p < .01$)。

「学業」では、t1の得点平均が、意欲の最も低い群で他の3群より有意に低く ($F(3,143) = 6.141, p < .001$)、t5「これだと思える職業が見つかるまでじっくり探していくつもりだ」の得点平均が、意欲の最も高い群で2番目に意欲の高い群と最も低い群より有意に高く ($F(3,143) = 6.162, p < .001$)、t6の得点平均が、最も意欲の高い群で最も意欲の低い群より有意に低かった ($F(3,143) = 3.153, p < .05$)。

「大学」では、t1の得点平均が、意欲の最も高い群で最も意欲の低い群より有意に高く ($F(3,143) = 3.089, p < .05$)、t5の得点平均が、意欲の最も高い群で意欲の低い2群より有意に高かった ($F(3,143) = 5.106, p < .01$)。

研究2

1. 目的

大学生の意欲のあり方について、ストレス場面での対応の仕方(コーピング)との関連で検討する。「意欲」については研究1で用いた下山の「領域別意欲低下」尺度全15項目を、「コーピング」については島津・小杉の「コーピング」尺度(職場ストレス用)(島津・小杉⁽⁷⁾、小杉⁽⁸⁾)全31項目を使用した。目的は次のとおりである。

- (1) 「領域別意欲低下」尺度の信頼性と妥当性を確認する。
- (2) 「コーピング」尺度の信頼性と妥当性を検討する。
- (3) 「領域別意欲低下」尺度と「コーピング」尺度との相関を検討する。

2. 方法

- (1) 被検者 私立大学学生 221名(男子170名,女子37名(未記入14名),平均年齢19.06歳,標準偏差0.882(未記入15名))
- (2) 材料 (i)「領域別意欲低下」尺度(15項目) (ii)「コーピング」尺度(31項目)⁸
- (3) 手続き (研究1に準ずる)調査実施から5週間後に個人の尺度得点等を記載した用紙を添付した調査用紙が返却され,授業のなかで調査の趣旨と集計・分析結果について説明を受けた。
- (4) 調査実施時期 平成21年12月

3. 結果

3.1 「領域別意欲低下」尺度と「コーピング」尺度の検討

3.1.1 「領域別意欲低下」尺度

確認的因子分析と項目分析により尺度の検討を行った。標準化係数の推定値は,全15項目が0.1%水準で有意となり,「授業」「学業」「大学」の因子間の共分散(相関)もすべて0.1%水準で有意となり,「領域別意欲低下」尺度が3因子構造を有することが確認された。

8. 「最近あなたが職場で経験した」という原著にある教示の「職場」を「大学やアルバイト先」と変更して使用した。

表 2-1 「コーピング」尺度（職場ストレス用）確認的因子分析・項目分析結果

潜在変数	項目番号	観測変数（項目）	標準化係数推定値					RIT	α
			積極的な問題解決	逃避	他者からの援助を求める	行動・感情の抑制	諦め		
積極的な問題解決	m2.	自ら積極的に行動した	.625					.533***	.789
	m8.	様々な解決方法を試した	.622					.542***	
	m5.	問題をひとつひとつ片付けた	.579					.483***	
	m4.	問題点を明確にしようとした	.576					.539***	
	m9.	計画を立て、それを実行した	.573					.514***	
	m6.	その状況について、さらに調べた	.542					.463***	
	m7.	その問題を解決することだけに集中した	.520					.476***	
	m1.	自分の過去の経験を参考にした	.504					.423***	
	m3.	その状況を客観的に見ようとした	.382					.323***	
逃避	t4.	「その問題は重要ではない」と自分に言い聞かせた		.490				.316***	.563
	t3.	楽しくなるようなことを空想した		.408				.313***	
	t1.	しばらくの間、その問題から遠ざかった		.383				.262**	
	t7.	独りの時間を大切にしたい		.382				.271**	
	t2.	自分の趣味に没頭した		.379				.347***	
	t5.	その問題以外のことで忙しくした		.372				.268**	
	t6.	「これは現実ではない」と自分に言い聞かせた		.326				.221**	
他者からの援助を求める	h5.	自分のおかれた状況を人に話した			.835			.584***	.732
	h4.	家族や友人に打ち明けた			.791			.543***	
	h1.	人に助けを求めた			.474			.488***	
	h3.	似た経験を持つ人に相談した			.449			.498***	
	h2.	その分野の専門家に相談した			.294			.350***	
行動・感情の抑制	y5.	解決のチャンスを待った				.497		.204*	.460
	y2.	最悪の状況を予想して心の準備をした				.422		.257**	
	y4.	早まった行動をとらないようにした				.422		.327***	
	y1.	感情をおさえるようにした				.235		.265**	
	y3.	不満を口に出さないようにした				(.075)			
諦め	a5.	時の流れにまかせた					.748	.555***	.683
	a1.	どうすることもできず、状況に身を任せた					.660	.483***	
	a3.	何もせず状況が好転することを期待した					.552	.473***	
	a4.	この状況は変えられないと思った					.422	.351***	
	a2.	その状況があるがままに受け入れた					.329	.327***	

因子間相関		積極的な問題解決	逃避	他者からの援助を求める	行動・感情の抑制	諦め
GFI=807,	AGFI=.776,					
RMSEA=.064,	AIC=885.002					
積極的な問題解決	逃避	-				
他者からの援助を求める	行動・感情の抑制	.267***		-		
諦め		.810***		.309**	-	
		-.459***	.581***			-

***p<.001 **p<.01* p<.05 因子間相関は有意なもののみ記載した

項目分析では、「学業」の1項目（s4#）が5%水準、残る14項目は.01%水準で該当する尺度と有意な正の相関を示し、α係数は、「授業」.684、「学業」.584、「大学」.700であった。尺度の内的整合性の指標であるα係数は、「学業」以外の2尺度について研究1の値を上回っており、許容範囲内の値と考えた。「学業」のα係数は研究1の.706をかなり下回ったが、これは尺度の内的整合性の低さを示すものではなく研究2の被検者群の特徴であると考え、「領域別意欲低下」尺度全15項目をそのまま採択した。

3. 1. 2 「コーピング」尺度

大学やアルバイト先でストレス状態を引き起こすストレスナーへの対処（コーピング）の仕方を査定する「コーピング」尺度全31項目は、「積極的な問題解決」「逃避」「他者からの援助を求める」「行動・感情の抑制」「諦め」の5つの下位尺度で構成されているが、この「コーピング」尺度が5因子構造を有

することを確認するために、下位尺度の5つの構成概念の各々を潜在変数(因子)として、観測変数(項目)は関連する潜在変数のみから影響を受け、すべての因子間に相関があると仮定するモデルにより確認的因子分析を行った。

表 2-2 「コーピング」下位尺度間の相関係数

	積極的な問題解決	逃避	他者からの援助	行動・感情の抑制	諦め
積極的な問題解決	-				
逃避	.122	-			
他者からの援助	.286***	.088	-		
行動・感情の抑制	.467***	.176**	.143*	-	
諦め	-.233***	.358***	-.037	.093	-

***p<.001 **p<.01* p<.05

潜在変数の観測変数への係数の推定値は、全31個のうち、「行動・感情の抑制」の1個の観測変数(y3)への推定値を除き、すべて0.1%水準で有意となったが、潜在変数間の共分散は全10個のうち、「積極的な問題解決」と「逃避」、「他者からの援助を求めると「逃避」、「他者からの援助を求めると「諦め」、及び「行動・感情の抑制」と「諦め」の4個が有意とならず、データの初期モデルへの適合度が低いと判断し、段階的なモデル改良を図り、共分散が有意とならなかった4個の因子間相関を0とし、さらに推定値が有意とならなかった1項目(y3)を削除したモデルで再分析したところ、GFI=807, AGFI=.776, RMSEA=.064, AIC=885.002と、AICが初期モデルの値(932.232)と比べて改善を示したため、改良後のモデルを採択した。項目分析後の最終的な結果を表2-1に示した。

表 2-3 「意欲低下領域」尺度と「コーピング」尺度の相関係数

	授業	学業	大学
積極的な問題解決	-.037	-.358***	-.307***
逃避	.031	.082	.044
他者からの援助	.096	.004	-.264***
行動・感情の抑制	-.123	-.271***	-.163*
諦め	.092	.233**	.157*

***p<.001 **p<.01* p<.05

項目相関係数(r_{IT})は、全31項目のうち1項目が5%水準、6項目が1%水準、残る24項目0.1%水準で有意となり、 α 係数は、「積極的な問題解決」.789、「逃避」.563、「他者からの援助を求めると.732、「行動・感情の抑制」.460、「諦め」.683であり、「逃避」と「行動・感情の抑制」以外の3尺度は許容できる値を示した。平均年齢36.6歳の被検者6740名に「コーピング」尺度を実施した島津⁹⁾の研究では、 α 係数は「行動・感情の抑制」は.554と低く、「逃避」は.686とまずまずの値を示したことから、「行動・感情の抑制」尺度は質問項目が構成概念を的確に査定し得ていない可能性があること、本研究における「逃避」の α 係数の低さは、尺度の内的整合性の問題というよりは被検者群の何らかの特徴を表現していることが示唆されたが、本研究の探索的な性格を考慮し、「逃避」「行動・感情の抑制」を尺度として採用し、島津・小杉の「コーピング」尺度から係数の推定値が有意とならなかった1項目(y3)を削除した全30項目を用いることにした。

「コーピング」尺度の下位尺度間の相関係数を求め表2-2に示した。「積極的な問題解決」は、「他者からの援助を求めると及び「行動・感情の抑制」の各尺度と有意な正の相関を、「諦め」とは有意な負の相関を示した。また「行動・感情の抑制」と「逃避」との間、及び「逃避」と「諦め」との間に有意な正の相関が見出された。

3.2 「領域別意欲低下」と「コーピング」の関係

意欲とストレス状況での対処法との関係を検討するために、「コーピング」の各下位尺度と「領域別意欲低下」尺の相関係数を求め、表2-3に示した。

「授業意欲低下」と「コーピング」の5つの下位尺度との間には有意の相関は見出されなかった。「学業意欲低下」は、「積極的な問題解決」、及び「行動・感情の抑制」の各尺度と有意な負の相関を示し、「諦め」との間には有意な正の相関が見出された。「大学意欲低下」は、「積極的な問題解決」、「他者からの援助を求めると及び「行動・感情の抑制」の各尺度と有意な負の相関を示したが、「諦め」との間には

有意な正の相関が見られた。

4. 考察

4. 1 「コーピング」尺度

「積極的な問題解決」への志向が強い被検者ほどストレス状況で「諦め」ることなく、「行動・感情の抑制」という自己制御をしつつ、「他者からの援助を求める」ことでストレスサーに対処する傾向が強い。

「行動・感情の抑制」と「積極的な問題解決」との間には有意な正の相関が見られるが、「行動・感情の抑制」は「逃避」とも有意な正の相関を示す。「逃避」は「諦め」とは有意な正の相関を、「積極的な問題解決」とは負の相関を示すので、「行動・感情の抑制」はストレス状況を乗り切ることを「諦め」、ストレスサーから「逃避」する際の対処法でもあることが示唆された。被検者により、「行動・感情の抑制」が「積極的な問題解決」に利用されることもあれば、「逃避」に利用されるという、「行動・感情の抑制」の両義性がこの尺度の α 係数の低さ、すなわち内的整合性の弱さをもたらしていることが示唆された。

4. 2 意欲とコーピング

「領域別意欲低下」尺度の「学業」は「コーピング」の5つの下位尺度のうち3つと、「大学」は「コーピング」の2つとそれぞれ有意な相関を示したが、「コーピング」の下位尺度で「授業」と有意な相関を示したものは一つもなかった。この結果は何を意味するのだろうか。

「授業」の各質問項目を検討してみると、例えばj3「何となく授業をさぼることがある」からも明らかのように、「授業」とは受講生の「意欲」とは無関係に存在しうる事象であるが、「学業」は、例えば、s1#「教師にいわれなくても自分から進んで勉強する」に典型的に示されるように、受講生の「意欲」なしには存在し得ない事象で、「大学」についても同じことが言える。したがって「学業」に意欲的に取り組む者が「大学やアルバイト先」のストレス状況で「諦め」ずに「積極的な問題解決」を図る傾向が強いことは理解できるが、「行動・感情の抑制」の傾向も強いという結果は何を意味するのだろうか。この点について検討するために、「学業」領域での意欲低下の得点の高低によって被検者を2群に分け、削除項目も含めた「行動・感情の抑制」5項目の平均得点を比較したところ、5項目中3項目(y1,y2,y4)で、「学業意欲低下」低得点群が高得点群より得点平均が有意に高く、尺度構成の際削除したy3「不満を口に出さないようにした」でも、「学業意欲低下」低得点群の得点平均(平均 3.10, SD1.407)が高得点群(平均 2.760, SD1.288)より高く有意傾向が見出された($t(219)=1.915, p<.10$)。しかしy5「解決のチャンスを待った」の項目得点平均では2群間に差は見られなかった($t(219)=1.176, n.s.$)。そして得点差の有意性が最も大きかったのはy2「最悪の状況を予想して心の準備をした」であった($t(219)=3.535, p<.001$)。

「学業」に意欲的に取り組む者にとって、「行動・感情の抑制」とは出現の保証されていない「解決のチャンスを待つ」という受動的・消極的なものではなく、「最悪の状況を予想して心の準備をした」り、「早まった行動をとらないようにした」(y4)り、時には「不満を口に出さないようにした」りという、知覚したり、想像したりできる具体的な「行動・感情」の「抑制」という能動的・積極的な主体的行為なのではなかろうか。

ところで、既述したように「行動・感情の抑制」は「積極的問題解決」及びこれと全く逆の意味をもつ構成概念である「逃避」の双方と有意な正の相関を示した。この「両義性」について検討するために、「逃避」の得点の高低により被検者を2群に分け、「行動・感情の抑制」の先の5項目の得点平均を比較したところ、y1及びy5の2項目で有意に、y4で有意傾向を以て、「逃避」高得点群の項目得点平均が低得点群より高かった。得点差の有意性が最も大きかったのはy5「解決のチャンスを待った」であった($t(219)=2.752, p<.01$)。

ストレス場面でストレスサーから「逃避」する傾向が強い被検者の「行動・感情の抑制」は、他力本願

的に「解決のチャンスを待つ」という受動的かつ消極的な態度に方向付けられおり、「感情をおさえるようにした」(y1)り、「早まった行動をとらないようにした」(y4)りする行動も、「逃避」の合理化のように思われる。この点についてさらに分析を進めるために、「大学」と「行動・感情の抑制」との関係について検討する。

大学生生活全般での意欲低下を査定する「大学」と「行動・感情の抑制」との間には有意な負の相関が見出されたので、「大学」の得点の高低により被検者を3群に分け、「行動・感情の抑制」の5項目の得点平均の比較を行ったところ、y3, y4, y5の3項目で得点平均に3群間で有意な差が見出された。y5では、「大学」得点が低く大学生生活全般での意欲低下が最も小さい群が他の2群より項目得点が高かったが($F(2,218)=3.843, p<.05$)、y3とy4では、群間における項目得点平均の推移は直線的ではなく、y3では、「大学」中得点群が、高得点群と低得点群の2群より項目得点平均が有意に低く($F(2,218)=3.422, p<.05$)、y4では「大学」低得点群で項目得点が高くなり、次いで高得点群、最もy4の項目得点が高いのが中得点群であった($F(2,218)=12.860, p<.001$)。

「学業」という限局化された領域では、特定の具体的な問題・課題と対峙することが多いわけで、ここでは「解決のチャンスを待つ」という受動的・消極的な姿勢は意欲の向上とは結びつかなかったのだが、「大学生活」全般では、「早まった行動をとらないようにした」り、「不満を口に出さないようにした」りしながら、長期な展望を持ちつつ忍耐強く「解決のチャンスを待つ」必要があるような課題が少なくない。このような輪郭や境界が必ずしも明確でなく即対応が難しく、速効も期待しがたい課題の例として、就職・職業の問題を含む人生の展開という課題、人との出会い、及び「アイデンティティの確立」等が挙げられよう。

大学生生活全般での意欲が乏しい「大学」高得点群も「不平を口に出さないようにした」り、平均的な学生より「早まった行動をとらないようにした」りすることができるのだが、こうした「行動・感情の抑制」は、低得点群に見られる、上述したような、曖昧状況においても希望を喪わず「解決のチャンスを待つ」という姿勢を伴わない、単なる奴隸的な忍従であり、新たな一步を踏み出す駆動力としての自身の原初的な衝動性に対する防衛に過ぎないように感じられる。

ところで「コーピング」下位尺度との相関について、「大学」と「学業」とで唯一異なる点は、「学業」と「他者からの援助を求める」との間には相関は見られないが、「大学」と「他者からの援助を求める」との間には有意な負の相関が示されたことである。その意味について検討する。今一度「学業」の項目を検討してみると、s5#「大学で勉強をすることで自分の関心を深めている」や、s3#「勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる」などに明示されているように、「関心を深めたり」、「疑問に思ったり」する主体は「私」以外ではありえず、「学業」とはあくまでも個人の精神の働きが決定的な意味を持つ限局された領域であって、「他者からの援助」は「学業」に二次的な意味しか持ち得ないのに対して、「大学」領域では、「授業」「学業」以外にも多様なタイプの行動・経験があり、そこでは、先に述べた、就職問題や人との出会いのように、「他者」やその「援助」が個人の意欲のあり方に影響を及ぼす可能性は「学業」より高いのである。

研究3

1. 目的

大学生の意欲のあり方について、依存性との関係で検討する。「意欲」については「領域別意欲低下」尺度全15項目を、依存性については関の「依存性」尺度(関¹⁰⁰)全39項目を使用した。目的は次のとおりである。

- (1) 「領域別意欲低下」尺度の信頼性と妥当性を確認する。
- (2) 「依存性」尺度の信頼性と妥当性を検討する。

(3) 「領域別意欲低下」尺度と「依存性」尺度との相関を検討する。

2. 方法

- (1) 被検者 私立大学学生 109名(男子73名,女子29名(未記入7名)). 平均年齢19.32歳, 標準偏差1.065(未記入3名)
- (2) 材料 (i) 「領域別意欲低下」尺度(15項目) (ii) 「依存性」尺度(39項目)
- (3) 手続き (研究1に準ずる) 調査実施から5週間後に個人の尺度得点等を記載した用紙を添付した調査用紙が返却され,授業のなかで調査の趣旨と集計・分析結果について説明を受けた。
- (4) 調査実施時期 平成17年12月

3. 結果

3. 1 「領域別意欲低下」尺度と「依存性」尺度の検討

3. 1. 1 「領域別意欲低下」尺度

確認的因子分析と項目分析により尺度の検討を行った。確認的因子分析では,標準化係数の推定値は,1項目(s4#)が1%,残る14項目が0.1%水準で有意となり,「授業」「学業」「大学」の因子間の共分散(相関)はすべて0.1%水準で有意となり,「領域別意欲低下」尺度が3因子構造を有することが確認された。

項目分析では「学業」の1項目(s4#)が1%水準,残る14項目は0.1%水準で該当する尺度と有意な正の相関を示し, α 係数も「授業」.762,「学業」.724,「大学」.688で,「授業」と「学業」は研究1・2の値を上回ったため,3尺度が十分な信頼性を備えていると判断し全15項目をそのまま採択した。

3. 1. 2 「依存性」尺度

個人の他者への依存性(依存のあり方)を査定する関の「依存性尺度」全39項目は,他者に対する具体的な援助の期待の強さを査定する「依存欲求」,援助の期待よりも援助を与えてくれる依存対象に関わる「統合された依存性」,及び他者に依存することの困難に関わる「依存の拒否」の3つの下位尺度で構成されているが,この「依存性」尺度が3因子構造を有することを確認するために,下位尺度の3つの構成概念の各々を潜在変数(因子)として,観測変数(項目)は関連する潜在変数のみから影響を受け,すべての因子間に相関があると仮定するモデルにより確認的因子分析を行った。

潜在変数の観測変数への影響の強さの指標である標準化係数の推定値は,全39個のうち,「依存の拒否」因子の1観測変数(x10)への推定値が有意とならなかったが,他の項目は1項目(v4)が1%水準,残るすべての項目が0.1%水準で有意となり,潜在変数間の共分散はすべて0.1%で有意となった。そこで初期モデルから「依存の拒否」因子の1観測変数(x10)を削除し,再度分析したところ,GFI=613, AGFI=.567 RMSEA=.091, AIC=1408.765であり,AICが初期モデルの値(1472.820)と比べて改善を示したため,改良後のモデルを採択した。項目分析後の最終的な結果を表3-1に示した。

項目相関係数(r_{IT})は,全38項目のうち2項目が1%水準,残るすべての項目が0.1%水準で有意となり, α 係数は,「依存欲求」.846「統合された依存性」.811「依存の拒否」.842と満足すべき値を示したため,関の「依存性尺度」から1項目(x10)を削除して用いることにした。

「依存性尺度」尺度の下位尺度間の相関係数を求めたところ,表3-2に示すように,「依存欲求」は「統合された依存性」と有意な相関を,「依存の拒否」とは有意な負の相関を示した。そして「統合された依存性」も「依存の拒否」とは有意な負の相関を示した。

以上の結果から「依存欲求」の強い被検者ほど「統合された依存性」も強いが,「依存の拒否」の傾向が強い被検者は「依存欲求」と「統合された依存性」の双方が弱いことが示された。

表 3 - 1 「依存性」尺度の確認的因子分析・項目分析結果

潜在変数	項目番号	観測変数 (項目)	標準化係数推定値			R ²	α
			依存欲求	統合された依存性	依存の拒否		
依存欲求	v9.	困っている時や悲しい時には、誰かに気持ちをわかってもらいたい。	.759			.661***	.846
	v3.	病気の時や、ゆううつな時には、誰かに同情してもらいたい。	.752			.673***	
	v8.	何かにつけて、誰かに味方になってもらいたい。	.710			.651***	
	v7.	何かをする時には、誰かに気を配ってはげましてもらいたい。	.634			.587***	
	v1.	うれしいこと、楽しいことは、まずだれかに報告したい。	.603			.500***	
	v6.	できることなら、いつも誰かと一緒にいたい。	.548			.533***	
	v11.	悪い知らせ、悲しい知らせなどを受け取る場合には、誰かに一緒にいてもらいたい。	.544			.502***	
	v13.	重要な決心をする時は、いつも、人の意見がききたい。	.523			.499***	
	v2.	できることなら、どこへ行くにも誰かと一緒に行きたい。	.450			.445***	
	v10.	人から、「元気ですか」などと気を配ってもらいたい。	.435			.367***	
	v5.	一人で決心がつかかねる時には、誰かの意見に従いたい。	.424			.396***	
	v12.	何か迷っている時には、誰かに「これでいいですか」と聞きたい。	.387			.397***	
	v4.	むずかしい仕事をする時には、できたら誰かと一緒にしたい。	.285			.289**	
	統合された依存性	w4.	自分を見守ってくれているように思う人がいるので、大事な場面も切り抜けられる。		.657		
w3.		自分の信頼できる人がいるので安心だ。		.592		.542***	
w13.		自分と相手の立場を尊重しつつ、必要な時には、うまく頼ったり頼られたりする方だ。		.571		.543***	
w9.		人は、支え合って生きていくものだと感じる。		.554		.466***	
w6.		心の支えになってくれる人がいる。		.514		.451***	
w12.		思い出だけで、心が安らくなるような人がいるので、落ち着いていられる。		.477		.450***	
w10.		誰かのことを思い浮かべて、元気を出すことがある。		.474		.448***	
w7.		あの人になら少々無理を言ってもいい、と思う人がいる。		.467		.426***	
w8.		一人ではどうにもならない時は、その時々で適当な人に相談する。		.460		.402***	
w1.		私がどんなことをしようと理解してくれる、と思う人がいる。		.452		.390***	
w11.		直接手助けしてもらわないが、誰かに話することで、自分の判断がしやすくなることもある。		.426		.372***	
w2.		最後は自分できめるにせよ、困った時には、信頼できる人の意見も求めてみる。		.405		.394***	
w5.		親しい友達や家族には、いざという時には、無理な頼みごともあるだろう。		.370		.338***	
依存の拒否		x6.	安心して人の世話になれない方だ。		.711		.624***
	x12.	人に頼み事をするのは、どんな時でも、非常な決心がいる。		.652		.594***	
	x2.	自分のために、人に何かやってもらうのは苦手だ。		.641		.590***	
	x9.	自分のことを誰かに相談するのは、何か不安である。		.637		.582***	
	x7.	誰かに頼る立場になると、どうも落ち着かない。		.622		.563***	
	x8.	人の世話になるのは、恥ずかしいと思う。		.561		.519***	
	x4.	友達には、絶対に借りをつくりたくない。		.555		.524***	
	x3.	恩返しできないなら、人に援助を求めるのは、ためられる。		.539		.498***	
	x11.	自分のことは、どんなことがあっても自分一人でしないと気がすまない。		.516		.465***	
	x5.	親しい間柄の人でも、甘えることのない方だ。		.449		.410***	
	x1.	どんな困った時でも、人に頼らない方だ。		.429		.402***	
	x13.	好意を示されると、とまどうことが多い。		.335		.302**	
	x10.	親切な申し出を、特に理由なく、断ることがある。		(.171)			
	GFI=.613, AGFI=.567 RMSEA=.091, AIC=1408.765			因子間相関	依存欲求	統合された依存性	依存の
			依存欲求				
			統合された依存性	.176***			
			依存の拒絶	-.363***	-.352***		

***p<.001

3. 2 「領域別意欲低下」尺度と「依存性」尺度の関係

「領域別意欲低下」尺度と「依存性」尺度の下位尺度間の相関係数を表 3-3 に掲げた。「授業」と「依存性」

表 3 - 2 「依存性」の下位尺度間の相関係数 (1)

	依存欲求	統合された依存性	依存の拒否
依存欲求	-		
統合された依存性	.427***	-	
依存の拒否	-.302**	-.307***	-

***p<.001 **p<.01

表 3 - 3 「領域別意欲低下」と「依存性」の相関係数 (1)

依存性	意欲低下領域		
	授業	学業	大学
依存欲求	.093	.058	-.208*
統合された依存性	-.080	-.238*	-.533***
依存の拒否	-.137	-.115	.223*

***p<.001 *p<.05

尺度の3つの下位尺度との間には有意の相関は見出されなかった。「学業意欲低下」は、「統合された依存性」と有意な負の相関を示したが、他の2尺度とは無相関であった。「大学意欲低下」は、「依存欲求」、及び「統合された依存性」と負の相関を示し、「依存の拒否」とは有意な正の相関を示した。

4. 考察

4. 1 「依存性」尺度

表3-4 「統合された依存性」尺度の因子分析・項目分析結果

因子	番号	項目	第1因子	第2因子	r ²	α
依存感覚	w4.	自分を見守ってくれているように思う人がいるので、大事な場面も切り抜けられる。	.688	.075	.597***	.745
	w12.	思い出すだけで、心が安らくなるような人がいるので、落ち着いていられる。	.688	-.143	.587***	
	w3.	自分の信頼できる人がいるので安心だ。	.642	.069	.253**	
	w6.	心の支えになってくれる人がいる。	.636	-.058	.451***	
	w1.	私がどんなことをしようと理解してくれる、と思う人がいる。	.581	-.080	.436***	
	w10.	誰かのことを思い浮かべて、元気を出すことがある。	.533	.003	.501***	
依存行動	w9.	人は、支え合って生きていくものだと感じる。	.371	.221		.693
	w2.	最後は自分できめるにせよ、困った時には、信頼できる人の意見も求めてみる。	-.124	.668	.484***	
	w8.	一人ではどうにもならない時は、その時々で適当な人に相談する。	-.025	.615	.456***	
	w5.	親しい友達や家族には、いざという時には、無理な頼みごともあるだろう。	-.105	.597	.491***	
	w11.	直接手助けしてもらわないが、誰かに話をすることで、自分の判断がしやすくなることもある。	-.018	.575	.426***	
	w13.	自分と相手の立場を尊重しつつ、必要な時は、うまく頼ったり頼られたりする方だ。	.220	.512	.326***	
	w7.	あの人になら少々無理を言ってもいい、と思う人がいる。	.105	.482	.449***	
因子間相関					.414	

***p<.001

「依存性」尺度の下位尺度である「統合された依存性」の項目を再検討したところ、実際に他者に依存する行動を表す項目群と行動よりは依存する相手が存在することから生じる安心感が強調される項目群とに二分されることに着目し、「統合された依存性」尺度全13項目を主因子法、プロマックス斜交回転により、2因子を指定して因子分析を実施した。第1因子には依存対象が存在し、その想起が肯定的な感覚をもたらすという意味に関わる7項目が、第2因子には現実的な依存行動に言及している6項目が帰属し、すべての項目が、帰属因子に対して.37以上の因子負荷量を示した。第1因子を「依存感覚」⁹、第2因子を「依存行動」と命名し、因子負荷量の絶対値が.4以上の項目について項目分析を行い、すべての結果を表3-4に示した。α係数は「依存感覚」.745、「依存行動」.693と各尺度が許容できる一次元性を有することを示した。

改めて「依存性」尺度の下位尺度間の相関係数を求め表3-5に示した。「依存感覚」と「依存行動」の間には正の有意な相関が示された。また「依存の拒否」は「依存行動」と有意な負の相関を示すが、「依存感覚」との負の相関が有意とはならないことから、「依存の拒否」とは、現実には他者との間で援助・被援助を交換する依存行動の「拒否」であることが明らかとなった。また「依存欲求」は「依存感覚」と「依存行動」の双方と有意な正の相関を示すが、「依存行動」との相関がより強く、「依存欲求」の性質が、依存

表3-5 「依存性」の下位尺度間の相関係数(2)

	依存欲求	依存感覚	依存行動	依存の拒否
依存欲求	-			
依存感覚	.227*	-		
依存行動	.438***	.413***	-	
依存の拒否	-.302**	-.110	-.335***	-

***p<.001 **p<.01 *p<.05

表3-6 「領域別意欲低下」と「依存性」の相関係数(2)

依存性	意欲低下領域		
	授業	学業	大学
依存欲求	.093	.058	-.208*
依存感覚	-.166+	-.315***	-.547***
依存行動	.036	-.081	-.266**
依存の拒否	-.137	-.115	.223*

***p<.001 *p<.05 +p<.10

9.不在でも想起するだけで自分を見守り、安心させてくれる他者との共存の感覚を内容とする因子であり、他者との現実的な援助・非援助行動の交換に関わる「依存行動」と対照させる意図もあり「依存感覚」と命名した。

対象との肯定的な共生・共存の感覚を含むものの、他者との間で援助・被援助を交換する「依存行動」を「欲求」する傾向が強いものであることが示唆された。

4. 2 意欲と依存

「統合された依存性」の分割を受けて、「領域別意欲低下」尺度と「依存性」の下位尺度間の相関係数を表 3-6 に示した。「授業意欲低下」は、既述したように、「依存性」尺度の下位尺度である「依存欲求」「統合された依存性」「依存の拒否」と有意な相関は示さなかったが、「統合された依存性」分割により構成された 2 尺度のうち「依存行動」とは相関を示さなかったものの、「依存感覚」と僅かながら負の相関を示した。これは、「授業」に対する意欲は想起すれば安心感を与えてくれる他者との共生・共存の感覚に左右される部分があることを意味する。「授業意欲低下」が著しい者はこのような「重要な他者」が不在なのかもしれない。

「学業意欲低下」は「依存感覚」との間に有意な負の相関を示したが、「依存行動」と無相関であった。「学業」に対する意欲の高い者にとって、現実には依存行動を交換することよりも、自分を見守ってくれる信頼できる他者との共生・共存が重要であることが示唆された。

「大学意欲低下」と「依存性」尺度のすべての下位尺度との間に有意な相関が見出されたが、「依存感覚」との相関が最も強かった。狭義の「学業」以外に多様な事象に様々な様式で関わる大学生活では、現実には他者と依存行動を交換することは不可欠でもあり不可避でもある。それゆえ大学生活全般に対する意欲が高い者は現実的な依存行動が活発であり、こうした依存行動を「拒否」することはないが、このような現実的な依存行動を支えているのが、依存対象としての「重要な他者」との「共生」感覚を意味する「依存感覚」の豊かさであるのかもしれない。反対に大学生活そのものに対する意欲低下が顕著な者は、実際に大学内での依存行動が不活発なのであるが、その背景には、既述した意味での「依存感覚」の弱さがあるのかもしれない。

討論

大学生における意欲とモラトリアムを扱った研究 1 では、職業について真摯に「模索」する者ほど、授業、学業、大学生活全般において意欲が高いこと、また職業について何らかの「決定」を済ませることがされた。逆に職業や就職について「模索」することを「延期」「回避」したり、職業について「混乱」したりしている被検者は「学業」でも「大学」でも意欲低下が著しい。

下山⁽¹¹⁾と本研究を比較すると、下山では「学業」領域に限られていた就職・職業要因の意欲に対する影響が、ほぼ 15 年後の本研究では「授業」や「大学」領域にまで及んでいることが窺われる。「学業」及び「大学」とモラトリアム下位尺度間の相関係数の値を下山と本研究で比較すると、表 4-1 に示すように、8 組すべてにおいて、本研究の値が下山を上回っている。さらに、「モラトリアム」と「領域別意欲低下」の相関係数を、「学業」と「大学」とで比較すると、下山と同様に、本研究でも、「混乱」以外の 4 つの尺度で、「学業」が「大学」を上回っており、就職・職業要因が意欲に及ぼす影響が大学生活全般よりも学業において大きいことを示唆している。

意欲とストレス状況におけるコーピングの関連を扱った研究 2 では、ストレス状況にあつて「行動・感情の抑制」を行い、「諦め」ずに「積極的な問題解決」のできる被検者ほど、「学業」、「大学」の双方にお

表 4-1 「領域別意欲低下」と「モラトリアム」の相関係数の比較

モラトリアム	意欲低下領域		
	授業	学業	大学
職業決定	.00	-.26	-.18
模索	-.17	-.21	-.18
延期	.24	.40	.23
混乱	.06	.23	.27
回避	.20	.38	.30

上段：本研究 下段：下山 (1995)
統計的に有意でない数値に下線を付した
有意水準は記載していない

いて意欲が高いことが示されたが、「大学」領域で意欲が高い被検者は「他者からの援助を求める」傾向も強いものに対して、「学業」で意欲が高い被検者は必ずしも「他者からの援助を求める」のではないという結果が示された。

また「学業」で意欲の高い者では、「行動・感情の抑制」は、受動的に「解決のチャンスを待つ」といったものではなく、「最悪の状況を予想して心の準備をした」り、「不満を口に出さないようにした」り、「早まった行動をとらないようにした」りすることで、ストレスや自身のストレスに振り回され、短絡的、衝動的な行動に突き進むことを回避して対応を画策しようとする極めて能動的、意識的な行為であることが示唆された。確かに、世界的な「冒険家」植村直己¹⁰⁾は対談の中で冒険家に最も必要とされるのは「臆病であること」¹⁰⁾と述べている。もっとも「学業」より行動・経験様式が多様な「大学」領域では「解決のチャンスを待つ」はむしろ肯定的な意味を持つことが示唆されたのであるが。

意欲と依存の関連を扱った研究 3 では、尺度項目の再検討に基づき、現実な援助行動の交換に関わる「依存行動」尺度と想起するだけで心が安定し励みとなるような他者との共生・共存の感覚という態様の「依存性」を査定する「依存感覚」尺度が構成された。「依存感覚」は「授業」「学業」「大学」のすべてと統計的に意味のある関連を示し、多様な態様を示す「依存」の基底を形成しているものと考えられる。

「大学」領域では多様な「依存性」を持つことが意欲の向上に結びつくが、「授業」と「学業」では意欲の向上と結びつくのは「依存感覚」のみで、特に「学業」において「依存感覚」が意欲の向上に大きな影響を及ぼすとの結果が示された。「学業」における意欲の向上には他者からの現実の援助というよりは、「今-ここ」で不在であっても、どこかで自分を見守っていると信じていることができる「重要な他者」との共生・共存の感覚としての「依存感覚」が強いことである。このことと、ストレス状況において「学業」で意欲の高い者が共通してとる対処法に「他者の援助を求める」ことが含まれていないという知見（研究 2）とは符節が合う。

結論

1. 「学業」は究極的にはあくまでも個人的な営みであるが、この孤独な営みの支えとなるのは、他者からの現実的な援助そのものというよりは、学ぶ者を見守る信頼に値する他者の存在とそのような「重要な他者」との共生・共存の感覚なのかもしれない。
2. 今日、就職・職業問題が以前にも増して学生の生活・意識に及ぼすようになったが、その方向性は就職問題が「授業」「学業」「大学」の内容・方法・経験を規定するというものであり、こうした事態は、2006年の「未履修問題」に典型的に示されたように、初等・中等教育が上級学校進学への適合性によって規定、評価される現状と軌を一にしているように思われる。

しかしながら、このような時代にあってこそ、学生時代の経験が卒業後の人生の展開の指針となるような方向性を持つ、広義の教育について考えることが許されるのではなかろうか。再度植村直己に登場を願うが、植村は高校卒業後就職し、翌年大学に進学し、それまで登山の経験はなかったが、偶然山岳部に入り、4年間で500日以上山に入ったという。後に世界的な「冒険家」の称号を彼に与える幾多の冒険に必要な技術や体力を植村は大学時代に身につけたわけだが、彼が学生時代に得たものは果たしてそれに尽きるだろうか。彼が学生時代に修得した最も重要なこととは、例えば「汝の造主を汝の少き日に覚えよ」（『伝道の書』）ということに関わることだったかもしれず、そうだとすれば、植村の例は、大学が若者に「造主」を「覚える」時間と空間を提供しようとするところであることを証してはいまいか。

10. 植村は（冒険では）「成功するためにはどうしたらいいかよりも、死なないためにはどうしたらいいか、が大きなウエイトを占めています」とも述べている（文献（13））。確かに「死」は「最悪の状況」であろう。

文献

- (1) Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*. (*Psychological Issues Vol. 1. No. 1. Monograph 1*., International University Press, Inc, New York. 小此木啓吾 (訳編), 『自我同一性』, 1973, 第1版, 誠信書房.
- (2) 小林邦雄 (2010) 「大学生の「意欲」に関する一研究」 『近畿大学生物理工学部紀要』, 25, 25-40.
- (3) 下山晴彦 (1995) 「男子大学生の無気力の研究」 『教育心理学研究』, 43, 145-155.
- (4) 下山晴彦 (1997) 『臨床心理学研究の理論と実際 スチューデント・アパシー研究を例として』, 第1版, 207-241頁, 東京大学出版会.
- (5) 下山晴彦 (1986) 「大学生の職業的 未決定の研究」 『教育心理学研究』 34, 20-30.
- (6) 下山晴彦 (1992) 「大学生のモラトリアムの下位分類の研究 - アイデンティティの発達との関連で -」 『教育心理学研究』, 40, 121-129.
- (7) 島津明人・小杉正太郎 (1997) 「従業員を対象としたストレス調査票作成の試み：(2) コーピング尺度の作成」 『早稲田心理学年報』, 30, 19-28.
- (8) 小杉正太郎 (2000) 「ストレススケールの一斉実施による職場メンタルヘルス活動の実際—心理学的アプローチによる職場メンタルヘルス活動」 『産業ストレス研究』, 7, 141-150.
- (9) 島津明人 (2000) 「ストレス調査に基づく職場メンタル活動」 『産業ストレス研究』, 7, 151-157.
- (10) 関 知恵子 (1982) 人格適応面からみた依存性の研究 自己像との関連において 『臨床心理事例研究 京都大学教育学部心理教育相談室紀要』, 9, 230-249.
- (11) (4) に同じ.
- (12) 植村直己 (2008) 『青春を山に賭けて』, 新装第1版, 文藝春秋社, (初出, 1971年 毎日新聞社)
- (13) 植村直己 (1984) 『男にとって冒険とは何か』, 第1版, 潮出版社.

英文抄録

A study on the Disinclination of University Students (2)

Kunio Kobayashi¹

The present study was an attempt to investigate the nature of the interest, or the volition of university students in the different three areas, lecture, study and total university life. Three researches have been done. In the first research admitted to 147 students were Shimoyama's Passivity Area Scale (PAS) and his Moratorium Scale (MOS) which borrowed some items concerning Decision on the Career from the same author's Vocational Indecision Scale. The result was that the subjects who had already made decision on the career showed more interest both in study and university life than those with no decision and that the subjects who were reluctant to perform an active exploration on the career were less interested in all the areas in university life. In the second research where admitted to 221 students were PAS and Shimazu and Kosugi's Coping Scale (CPS) the result demonstrated that subjects who had more interest than others in study area got higher marks on "Active Task Solution", "Control of Arbitrary Action and Emotion" and lower marks on "Abandonment" in CPS and that those who had more interest in total university life showed a marked tendency toward "Expectation of Help from Others (EHO)" in addition to the same tendency as those who liked studying showed. The result of the last research where 109 students answered PAS and Seki's Dependency Scale showed that "Depending Feeling toward Reliable Others (DFO)" lay behind various modes of dependency and that the subjects with higher marks on DFO were more interested in all the areas in university.

¹Department of Liberal Arts and Basic Education, Kinki University, Wakayama 649-6493, Japan